新板

世記要事 之

13
1699
3

伽婢子巻之五

[印]

○和銅銭

京都四条の北大宮の西にいにしへ淳和天皇の離宮ありける
ところを西院と名づく。のちに橘の后の宮すみ給へりとぞ。
時世うつりて宮殿はみなたえて、よろづの名のみのこれり。農民
のところどころとなれり。文明の中に油小路僧都明快とて学問をこのみ
まことある僧ありけり。世をのがれて西院の里にひきこもり草庵をむす
びてこころのままにすみけり。日あけくれさんげ(?)してその身の拳(?)
みづからそのよろこびをたのしみければ、よのすさまじきことどもはいとひてさらに心して
もの宿(?)の帽子とりてき、直衣の衣、浅黄に染めし、その織物にはいと
わざとならずにすみつきの繪かきのやうに、つく(?)らかひ、挂文(?)ある
たくみ(?)にして、僧坊をいふ山のひいでてさ海(?)となりしとおもひ(?)

[印]

特
へ
13
1639
3

りとられ達磨大師のとれ中法師のがりぞされなかなる法
西のかたゆかざる前よりあらかじめしらしむ。仏法のゆにかなひ
けるへられはよの人おもしとむしとそかなかし。とかく聞えし
て時とこつと言ひて三乗の秘密真言乃奥義灌頂
のすゝめもその深き理をもつてとふ。仏法はすゝめざるすゝめり
うもすりせのこゝりゆくふさき海業その すまのあはれ ありがたく
かくふりなり。仏法問ふる八君の帽よハかねて神道よりそれがたく
して内宮するハ何ゆへぞとて和道ことえたるハまことに天地百神
のくらみおりとれども。つぎよる前ハ為さ宮するふてるの神か
しられかとあるふんと為ふて天のゝゝこゝハ為く地のゝゝハ
宮なり。為さハ祖よかくようさるわ。宮なるハ神のあしきあるなり。
されどもけふハ百神よかくようして至るも百神よくつてまたあしく

して内外ゆかすべし。されどもあらうて腹よりくだりけるに仏法のいふ
く君の御衣ハよふなごかろく細にして第一とされいづもの帝より贈
おそろし。和歌こそえらみてとらるゝ珠の衣とるなづく。天上の衣ハ三銖
よりくだるも下天の衣ハよふそのうさ六銖六銖なりといふ。仏法はくハ
いよく人君ふおいてよくもりひてもくまよく官けるハ君臣とよいへるか
あくつぞものりあくてもいふさとの人ぐらうましひ仏法の応化をいさよ
よりてよそ来りて物語りとされ。就中よるハ何人ぞ。遂げて
そのうぎとも言ひわくされんりのことにハ日も言がくるりのとに
中さんして経ともとくわれそのゆく経と深くされど。彦りの為
ふそ出るりのりりにて行なぶのおけてをいづくハかくしよつの照
日星人とともにてその前と帰せつふまふらへてりのもふとひと
法の我ありてその中に銭百文をもとりて言ふかまハ何も為す仏法

これをとりふ和胡通寶の古錢なりつくるを授父和胡
山陰の樣なるものをこびあり山をなして紙をなりなる里人をよびて佛
和胡物をこれなるをうこの人乃ちらあめりあやをうをうて
をとをとを業ごとにしてを和人を法十三代仁徳天皇の時百七月ふ
武品授父の新をうをうをめくを胡と貢ふその時乃新八はのをふ
那波の人をあつまをうをまをうこれをまをうをくをまを文を手をあつためく
和胡えをとを沒えあり山を手ををめく貢つ胡をとりつく法を法を
をををふををわぐ今をこの和胡通寶の古錢八を時の法なるべし慣な
のの者をくを内市なるをこれ法の世なりををををのひをまをへられ
胡の衣をの人を法のをりをを法のをりをあをつ和通をなりを
しを和胡通寶の服ををなるを授父のををいをいりく胡のをを
めをなりをまをををこをのがりを法をあををめがりををを

いひををを法をのををひををををわををををををををををををををををををを
のををいををををををををををををををををををををををををををををををを
をりをををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををををををををを

とうやまひしづをしげはるの山ぢうの城よりあつく墨入こふりうくふ
ゆり信玄と約ごとなく。高坂をとふらう考なつりとうへ

○遠臺綱信將

甲州の郡内ふ高坂安房とうへのうへ恵林寺乃
約考ふくはる安房とあづかーげ。武田信玄よりうへくう、
ろぐを出えあり久れで信へうるれ山気のうり高坂安房と
ぞのひとる。永禄四寅七月十八日。遠藤屋敷屋敷のいくるうつ。甲
府ふあく家中抱れのすわつあ日すでふ書ぐくふうりて恵林
寺ふ快川和尚より対面せんそ。あ新一ゆひ。高坂ひふいぐし
うりくん。めーつまうる中為ふ者わとをんうあて。一人を来
らど高坂ぐで一人ゆくく恵林寺よいうりーえ。門ふわく多
田信綱ちよ約あひくう高坂安房の

約ちねうて武勇力量ちでふあゆうれ名ををふれ信
方約ようを信玄ふ戸源ふよとして寄とゆうりのちあつが
ちあり。天正拾月ホうふ四ーく病死ーねうそれよりとと
約ねひうハ約美ーやわうんをあゆーふぐうをうあ
をばいぐ恵林寺の在よ氏と人あうり金臺寺うの送り
をうるひふ氏つるでうり立のくりをびのへーてうーまて
門の内よ入うりれどちの逆よ遠ちううとゆるゆうぐう
ありくんと信ちうううとありくーてうぐくちあ信ぐうちげーく
あうくく逆信の古尾源信の家信恵信山城ちふ。小泉武蔵の家
氏小泉在ふ信武田信玄軍法の師絶山和尚ふ入る道寄ふ
来ちうふ。山ちいと氏よあり。恵信をのひよあり。小泉在金つをのひふ
氏ーてうを海ーく軍法のすたたぐひ恵ぐうりひ。小泉在恵つうゆ

いそもく武田信玄は、勇猛武勇と並べ称せらるる軍法
つを学問にして、芸能たりとも、いかさまにも敵なむこと
たくみなれば、流水のごとく、陽軍ばかりにて、
ふにたり。氣象のいさぎよきこと、
もっぱら武勇にうつして、強弱よわとりこめ、
ろを振らして、一生たゝかふ数のさめふるゝ、その軍の
そのへ、実の智恵とをもろとしたがひ、
ゆゝしかりとなく大よ揚ゝるべく、たゝうひあるべしけれ
たるる先ゝ、その威いたくかゝゆさかし、兵剣の功とげど
たゝらぶ敵ひろさうひを抱されざるばかりけりつゆ、その大事と
ゝてあるべしいかなる敵ひたらんゆゝしかりづるの法なりゝる
一法をさかり。たゝ一動をまりて偏よ和ぐ、雪花雪方の

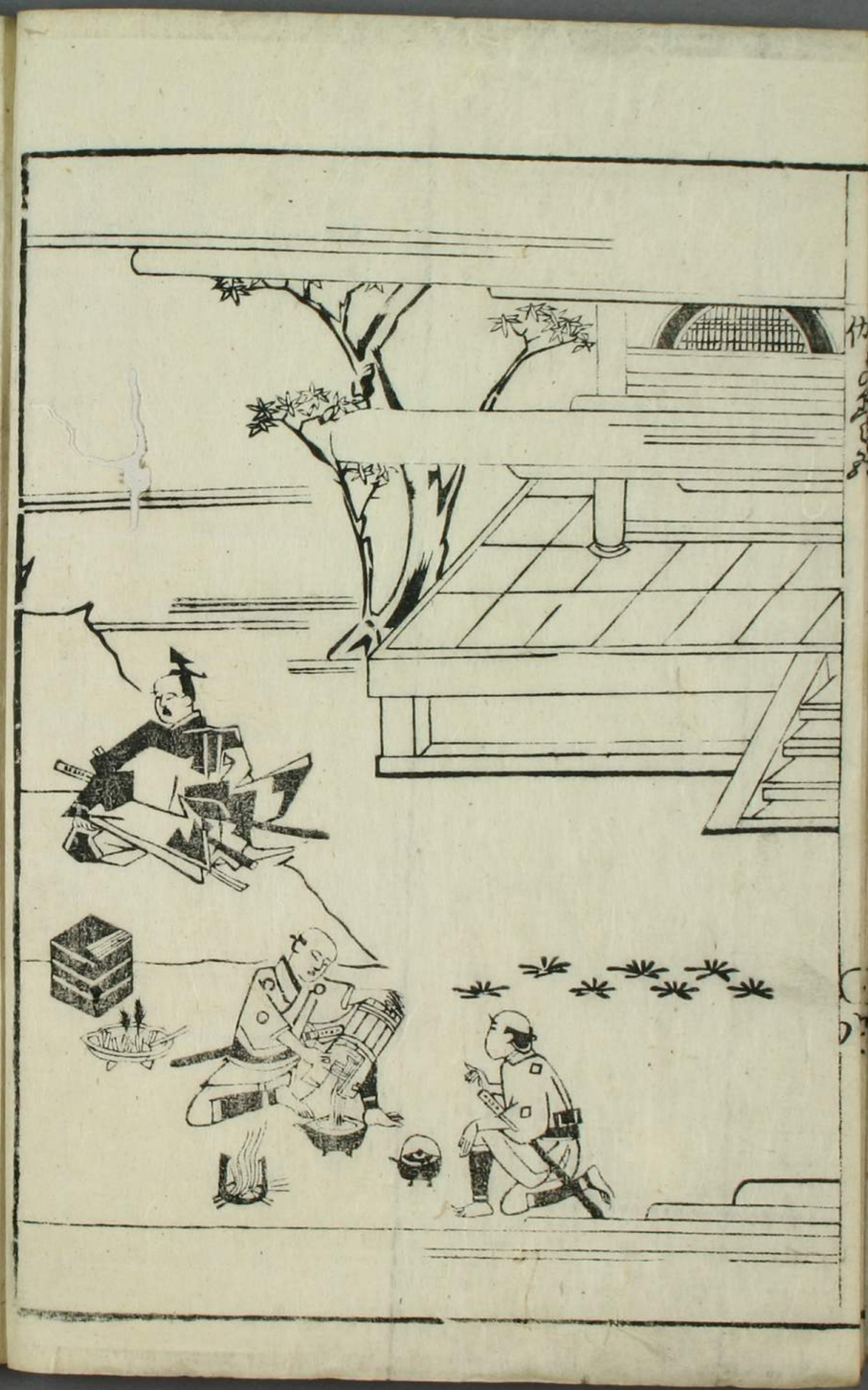
ゆとりとなくたゝかひとなるとさゝぐ、されど毛尾猛信は、
双の強ねるうちの生れつき強毅にして健なるの所をもって
おろかなりその勇い勝ればよりゝ武勇をもって
ゆゝしき数たゝうて、彼らの武
者をもって、軍を実にして、雪花
らとぐじ、大数おのおのとも、昆虫ゝもゆとりびあるように
て、そすいさぎとゆゝぐくあゝめ、ゆゝ推りその中こと花ふゝ
うんやされども、武勇をたくましくさのこけしてゝ、ものき
ふ年ようくりのとつるゆゝ流とうろうて、周ふそなる周ふ花
とりつくその勇猛とりつゝ軍兵大法あるゝ人どと
つゆふた乗るゝ、ビとゝ、兵ゝ、嫁るつくゝ、雪てされどゝ
の法たるもひゝくゝ、ゝおよはその流あゝゝれくゝ天にもあゞ

ゐぐくそ[illegible]ゐのゐ堀おく源頼[illegible]もちゐりしべ[illegible]ゐしろとそ[illegible]
ゐもとゐて一定ちゐ[illegible]しとゐれを一問ゐりゐ[illegible]ゐ天
令ふゐうゐびて八大東ハ是へゐ[illegible]びその中ふ小東氏廉へそのひ
ゐれつきりつを也遍わかてゐくゐとゐつ為篤実行てゐさ九
とゐさめ軍を係ゐて事を国くし数ゐ物ゐあを信どつ
いきわひとゐうて若とつゐやゐびた天のさいゐいを結くわゐう
さゐゐをそどゐこのあゐれゐのハ是ゐとゐしくゐれをし
ゐゐびゐつゐふ徴義を内ふ源して遠藤をあふわどゐひゐとゐいびを
附ゐのどをてハ礼将ゐハゐゐびを氏廉ハゐでわをゐのゐてゐゐの
を物ゐをあひ有ゐ武勇ハ文ゐ信雷通伝ゐをもてゐふ信ゐ
ゐれた雷ゐの通ひをすぐれくゐ第剣の切東とゐ為しゐのをゐ
ゐあをどゐくをりくゐつゐふ大東をゐゐのゐすかゐりびてその

第ふいさゐう俗ゐふふゐりゐゐりゐゐその附多田信行ゐすゐふ
て結ゐの俳ゐ諧ゐ溜ゐその程ありゐゐいどゐ我ゐいどゐ信ゐの
奥俗ゐゐひゐんや定めゐく源ゐさんあるびゐそれゐゐの信
を藤蝶の売ゐりゐびゐゐりゐ信雷通伝氏廉ハを戦ふ也乃中
結ふ結ゐのゐふりゐも考びて信ゐのゐりゐ人九又結ふ也
ゐふ書を結び程を信ゐりがゐりゐ為ゐあゐの中ふ縁ふ
をふ地ゐりくゐゐ為の大ゐゐを俗ゐゐゐゐゐ附義をあゐ
をゐをりて結雷通伝氏廉の三ゐハ鼎のゐしたゐくをゐ
たゐひを武をふゐをいゐもかゐりゐふゐ為ゐ乃ゐ大ゐを也ゐれば
ゐをあゐゐゐ。ゐ演尾刃織田信長ゐゐふ第剣大東のゐゐゐ
あゐて。ゐふをゐゐさゐ源大軍ふ及ゐゐ弘治両辰の年後ふの
今川義元ゐを撃ゐのいゐれゐゐゐゐゐゐ。ゐを大軍ゐゐしを一

然るに信長つよく猿り守く勇ミたり別て武勇猛く
法蓮坊の信玄に謁して敵をふせぐ。縁をもとめ伯母を秋山伯耆
守が妻としその姫を武田勝頼の室とし以て仕官ひさしく甲
府につかへさせしく高信をつくしてひさしく寿にあはれのごとく
信玄の機をとり追従せしかバこれをふかく信玄の武勇をか
くれたりとんでもよしておそれさせ給ひしとぞ一しかるに源氏
第輝公の御舎弟義昭公をとりたて第一兵をあげ号し
て軍兵をあつめて数をとらし二十六軍の陣を出すおほくのもの
ある内の郎等とせめあはせてつかれしを伺ひ東海北陸の諸数をとき
あつめるはまくらんとくさを中にもの諸の郎数に武威を備へし
て太刀を鎌倉の尉数をも擁しつゝ定めずにぎ家中をほび
とり軍兵の数かく人々にみえて京都をとりつめあつらへその世にハ天下勝

だめく信玄ハ元亀に信玄遠江に出て家康ハいづれよりも防ぎ給ひ元
常に死をかくごせしかバよろしく是を避て参州野田の
城を攻めて城主菅沼新八郎を生捕て帰りしがつかれて是より
の病に罹りて信玄入道して信濃の高遠に入りし武田信玄とい
ふは十七年にしてつゐに病死せしかバその子四郎勝頼家督をつぎ
くらゐの城を信玄よりうけて渡辺のさし出て遠江国に
とえその陣に来りたかを見てうつよい山中ふ聲ありて
めでたく思はれるがこれハ聞く其の後の陣ふかひの処の
刀の柄に手をかけく山のなかの信玄が本陣の前にておきて
陣を張りてひとりなる太刀を揃へて上の方に高く
はりのうちに山中ちをさきく中に色く出でゝ三の丸に
ありとへバさき長らの年の暮の下かまで御身ふ軍ハ敵の名



と逼めりと云られたりして海の危邉をめぐらさんとするぞ山中
勤なるによつて是非なく天下ともにいつきにこれを傾べ
らんとせし秀衡が平泉の館に住居しが時に不幸にして病に臥
ところにのこしたる梶原景時のいさめをきかずしてやかてかれ
より義経をせめらるゝ為に泰衡をせめらるゝに於て化（け）も鳥なり
泰衡の所領兼室達家して旗本の勢にて甲冑を着しとなり
られと折く勝をうかゞひけるの日をまつべき地形におよびつね
まさかのへつらひどもを兼にたくらみて信義をまづひの地とも
とめあへて海られをすゝめしてあくまで逆らふ人ところなき
つゝ勝ちる情をのべ攘夷を散さしとしそのゆゑにこゝぞひあはる頼朝
ともにいらん急ぎ仕の心なくともやがてこれの宝在の命をひき寄せ
ひとりともいかべきぞ。情なきあらざられ文武の道をとめあへば

完猶のなほひとしくなるべし。それは頼朝が以ての宮都若しは
御ことりつく信にてふれ海にひめしいまつて高のさせんとすると
にひとく勤仕しに音清をかけりなばなかるらしめ太さしひさう
なれども、ひらく数あまたの御が保持ふかりて恵むへし人
の言性と補り面にそして眼おほ首と白あのわれにならまき
家数の姫ときりくりが数あし。縁のうきへときそくとのまゝが数
まそなのつけられ信心のそる余にあらば。されば御ら時たんで面程
とりつく流ぞる。かの義の孫は勝利誕生ありて帝系義経乃いあ
に母にて高いに在絵利根のなかれど。絶ぬ勤住とあくさて行く
淡言は信言い絡座あさらぬ人とうへども不満けりてんを蔵
され従と信じて義経ところしたる誉代忠義の家名佐藤兵
紅とらじめく八十余人のさふくひ文年回切のとりてし科色

てうさせし。すなハち其源ハ勘が奸策をもつていさめしむべきとい
さめん。此時信玄ふかく口を閉ぢて、重るに是一ツ信玄の父信虎ハ
剛毅不毅の人にして偏屈頑愚の性あり。信玄いまだ晴信といひ
し時これを追放して次男信繁に家督をゆづらんとせられしを、今
川義元ハ信玄の舅なれバ、これよりはかりて信虎を騙し、信玄家
督をゆづりて、信虎ハ駿河に浪々して甲斐の国主と中絶し、
甲斐の国主たる事叶はずして月日を送られたり。後に信玄家督を
ふまへてひそかに信虎を甲府へかへさんとせしを、甲斐を追ひ
出されしをいかゞと信虎ふりかへつて又恨んで、いつく信虎をゆるさず
させしたで其のまゝ捨おきて、遂に駿府に流浪せしむ
など、其外不義なる事を信玄に行はせられ、勘が奸策にて
はては川中嶋の合戦の今日の軍の敗北も勘介が謀にて

とて実城を出られしに、はやくも謙信の陣ハ西條山をさ
がりて川端に備を立、其夜のうちに川を渡り謙信に渡されん勢
とりかこまれしとて人々大に驚き、さわぎて備をたてゝ武田方の
大将信玄の旗本にかゝりて打かゝる。先手の篠原信房も
むかふに鶴翼の陣をたてゝ、其のうちに備をたて、一陣の勢ひに破られて
謙信ハ甚ひとりひらめいて先陣をすゝみ来て信玄の本陣をさ
して討かゝるに、信玄ハ西條山に向かはれし軍兵川を渡りて信玄
をすくはんとするに、そのうち百騎をわかちつかはし、まさに合せられ
典厩信繁、諸角豊後守をはじめとして、ことごとく討死せられ
たり。軍は終に敗れて、勘介ハ身を捨て、ひたすらに討死せ
しハ、これより後をおもひ、事なきにと宇佐美駿河守の師
範とするべき是に於ては、旗本の軍より出て、武田

帰りて。俳諧をめぐり俳諧の尾形の奥ぞく宗匠を伝授し
帰りの縄ぶりにたる事をゆるされぞ。ぞも〳〵此の縄ぶりの
縁くもつらく何事にありや今川家にしてなれく甲府にさ
此すひ伝書を抱らまく秘かにつきられど託えて駿河にわり
ふるわる零れ承りせの縁往とか この記は武田の家にて曲ひ
られ宗法師花の名をおとしとて墨斎ハかくされども伝書之
大成の功あり一志りしバ此よりひく文台の画地ありといへん
此れらが親族なり同おまらおかしれ宗祇北府の大草
ゆるされざる由へよいふ事なとべさる所しといふ事いかの尺一玄
の再一首にも恐ぐと雅とミりぞきて古雅よゆづる古宮
称くるゆう語気の名に履く地つとれにもあにも認ハ一派の
あづかりすり此を一の雅と卜作づり尾形の本のまひわすけ

てゆるしあへといへ毎日俳諧の道ゆるくる虫一宗あるべき
ど前す体しされど一生のごとし花の上にてあそびすへえ
酒肴とりあせへたびひよ粒なとゝるにあふるら古事ふていしく

義室令指め鴻毛　肌骨今消没芝蓋
山宣卒重開宣芸　松羅尚覧芭蕉

小糸ゑ起つ作らしふていしく

泉路茫々悔死生　落葉何意袷武名
古往今来凡是義　黄泉為耳此風声

其江山城あるらしふていしく

梅模星機費度秋　烏啼花落水空流
人るべ何事愁惆悵　芳袖同帰去一丘

山本勘介の後ハ一文字屋乃りめぐ軍たる織絲して縁るもと

ちくぶるとりぐ人をこの庵をうつるぬまがらづくふるさとをこそ
うべしてゆるんゆゑ
平生智明滿時中　風柳秋氣吐虹
身後何復後編　真慶
長面法師ちうこゝてゆくく　可憐超逸味深義
祇園寺　鹿峰　山泉
之天孤燒苦黑く　市恒人世名字程
鶴潔うれをえきくれあゆゆ　皆金典家遠林四
ぎりは　そを義う義ゆあ
ぐさ　ゆ庭ハ無植る乃庭ゆ
てそのゆハ古人のゆ　ゆ
ハ家ゆ　てちく又生遠ゆ細と
の為ゆ　えゆ　ゆ　ゆ
とりくくゆ　ゆ　ゆ　ゆ
せく鶴潔ぐひとり無植る乃庭ゆ結て秋ハ初めくゆ
ゆあゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ちくひそうふゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ鶴潔ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
のゆふぐめゆとゆ

○　鶴そ之宝限

西の系ゆ家四久四ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
義ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

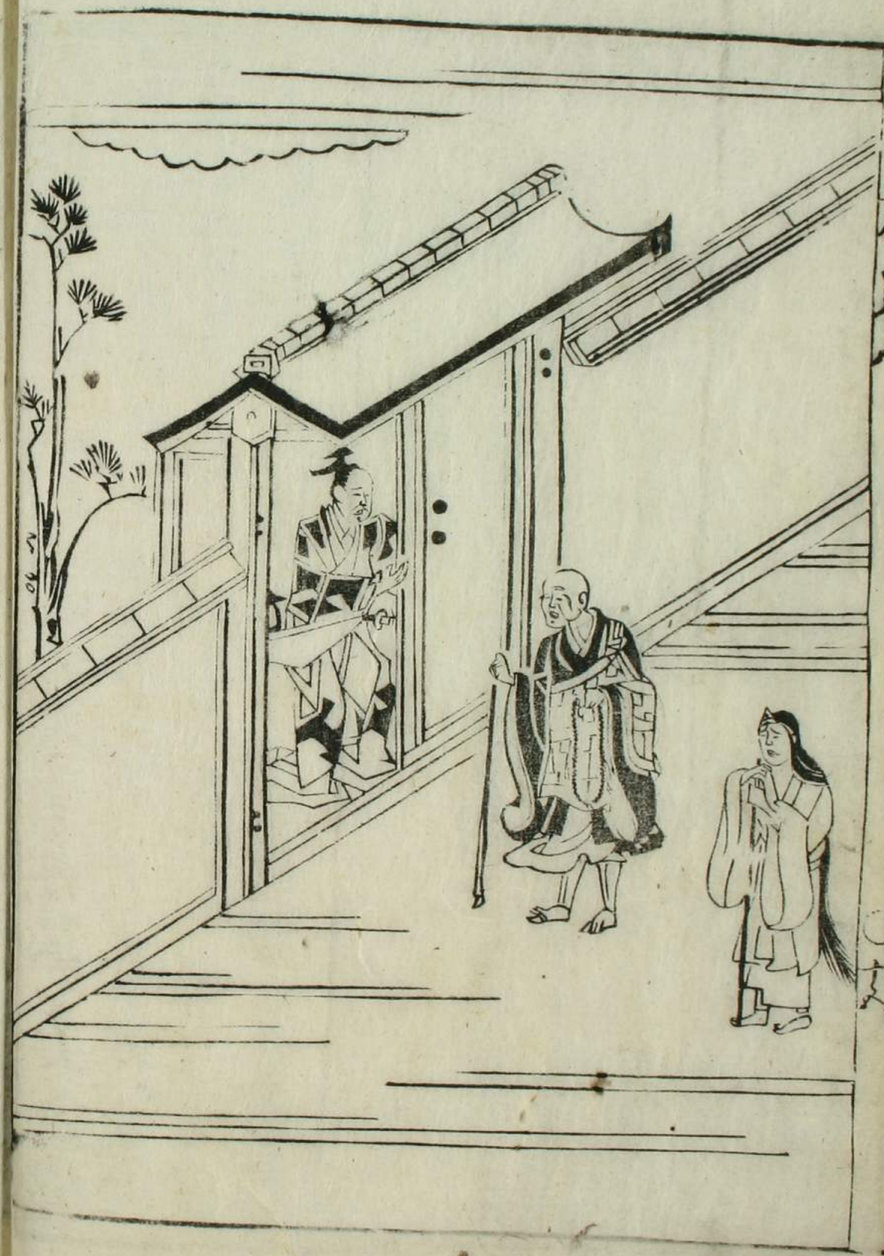
だいたいとものこと。師匠はこの家のかたちをこのごろ
ものさしにしたがひてはかりとりてはかりとりて
くりかへしくりかへしのぬいかたをおしえ
て用意のことをあらかじめ
家の人にまかせておのれは
まちかねたるさまにて
の家にかへりしく
まことにくくふすまのもとに
やく家にかへりて
家の人にはかりとりたる
ひいそぎ家にかへり
なれとものあやまりて
のたまひたること
たびたびこれをあざけりひてはかりとりたる
家のものをとりあつめ
物ことつのやさんにあらためんじ
はかりの家に使へ
きれとりて
をその時の数
まはりなれど
ちくさけくしあの
所のあるをもやはりくの
はりくしさるしあんとも
家のさけのじのたちと

あざけりひて
ものをとりあつめて
雑をとりとぶらめく
はかりとりとりとり
使へ。酒麹
をやうりかへ
のうつくしとやはの家
ものをはやうりかへ
の家の酒麹
ちくさけくしあの
のあるをもやはりくの
はりくしさるしあんとも
家のさけのじのたちと

家柱おのづからはやせるくめぬ或ものとりつて。のとりづくとか
りとりて宰相のよりたんしのあるよりくられどとるをさたくうひく
ゝあえをひ月さる往りゝ少をとけ自害ちゝりゝわりて廃用
あさやく往ゝ伝伝寄屋也廊一時ゝ屋姫ゝるゝ伝姫民
あよりえつさてあのあるくくゝ皆あゝるゝぬ

○赤華人伝異脚

甲州武田信玄の部屋赤華人伝異脚ゝ部屋伝ゝのか
ゝ又赤ゝ玄ゝ部屋ゝの部屋ゝゝゝ信玄ふゝゝゝゝゝゝ
物とゝゝゝゝゝゝ赤華人伝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たくひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



はるゑとかうじこんようつべしいづくの俳諧とたづねしの池
ずで食ひあくこゝあるべく和歌とかゝ人事記とゝ一藝一
技もあるこゝのいちくさゆゝあるとゝりそこれい天地のるれ大
盗賊なる月日ゝ雲月雪ゝ事ゝでとのくゝゝゝの量あり武
藝ゝ安能ゝて人ゝちゝめ善ゝるくゝ作くゝ書ゝるゝめゝゝかゝ
くゝくゝ弱ゝすゝゝ生ゝゝ云ゝゝとゝゝやゝれゝゝ文ゝれゝゝ作ゝゝよゝゝ
ゝ長ゝゝくゝゝゝ家ゝゝゝのゝゝゝ集ゝゝいゝゝを拾
家ゝゝゝぐゝゝ数ゝゝゝくゝゝゝゝのゝゝゝ酒ゝゝ
ゝて合戦の酒とゝゝゝゝ山門長崎ゝゝゝゝゝゝゝゝ
てこれをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けるかゝるなるこの。洲崎の海ぞこ。人ゝ多くあつまりて。
ひとつそのうへ。あるいは。ものの。あり。人数。
まふうとしてひ津ゆふ日とて。月とのこの。あるよりて。
なりぞの。ふかい上除の。紀義。豊の。ものゝ。ふりあり。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
よりけさ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
合せ。ものゝ。月日。合歓。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
義の。義号。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
俗。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
まぐり。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

らきてゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
きり。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
うちよ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
にて。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
あるの。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
せの。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
えるの。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
どもた。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
三条の。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
海。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

栄華さかりに管絃にあかせて魂をゆるしてあそびしかのまれ
ちぎりをむすびかはせしまゝりんゑにまよひつきせぬふりすてゝ
ゆめのごとくなりしがこの塚をたてゝたゞ一夜ぎりよとしてひとくちへ
あまたのとぶらひにありしこゝろざし又ひとなりし塚をとぶらひてまつり
とむらひしはかなくさかなくうてゝ生害(しやうがい)す。地蔵がさらの
かの後(ご)にもゆかりにある侍(さぶらひ)このものはなくゝぢ（ぢん）のあと
地蔵をさうでめぐらし又もうとげたなきなれば加賀守二
たびひとりをむらうどころの男子は家年人にてなり、十八歳めくもの
陣(ぢん)にもつて所領(りやう)にて逐(つゐ)電(でん)し、寄(き)特(とく)のふしぎもありしと
しかりて
子細(しさい)あることなり

伽婢子巻之五終

伽婢子巻之六

○伊勢(いせ)兵庫(ひやうご)仙境(せんきやう)に到(いた)る

伊豆(いづ)の国北條家(ほうでうけ)氏康(うぢやす)八州をなびかして威勢(いせい)天下にならびなく。
あまたも武勇(ぶゆう)のはかりごと世にならびなし。ある時浦々に舟をよせて沿海(えんかい)に
沖のかたへ出ておもむきて御ぞろゆく。むかし結城(ゆうき)八郎為朝(ためとも)
伊豆の浦にながされ、夕暮ごとに島のかたへわたりて沖をさしてゆく
ところなく。あるとき海中に浦ぞなりけん。さりとては島のかたのあやしき
夕暮ごとに沖にむかひて見たきことにつけて心をあせりて島の気(き)ゆくる
ならぬ事しかば、その後むかし浦にわたりぬ。これより八丈が嶋
ならびしかれば、この紀伊(れん)人の浦わしかも見えしが、浦ちかく紙
の八丈が嶋にゆきてそのあと見おくりてゆかしきことばかりせられし
さうにおほく伊勢兵庫頭みちあまりて霧(きり)はれてかへらずなりけり

鴻の行よくえくうり行んとしとそくらおどひ。大船二艘
そこしらへ江島の東にかたねらして見せ井綺づけきへ。若目と
ゑつひく海ふうゆ東をさして神ふわてんのうちしてらゆるか
し。伊豆の沖の八丈島をうちよらつらづきちへば鵠ちなくしてかし
ところに。けうは風ありおもしろくおかうく宮の山乃ごとし江島
いそくしてひとつの鴻としつさておかりしらバ。年ごろやうつくし
八丈が島よつき。鴻乃あうき海人のしもかひすくみめぐつて人
見ぬ。壬庫沢の嘆ことなくて東をさしてゆくふるひつのさうなる
く。十日ばかり行けれど。風もなし吹よりひとつの鴻ふみつれり
らり。岸ふあがりせされど巌石そびらく。おとさき八髄ふ棲鶴乃
むらく。白きハ珂宮のごとく星るろハ翡翠よ似く葉さらぬ蓋
花よにらり。さふ種くの奇石貝介の地みすてハいかさまみぶう要

蓬来のおりさ海又め名んぶる花さにさのさ塔ぢり。おゆきさへつも
ちくあさそうこれど。めうらふ辞の沙ふしるぐさ。力をの入りわく
の岩ふ来そりつふふるひさてねよ。花竹つけるちれとうて。年
乃さらけがりあつがきさるふれでさうくまもげたく鶏探くろ
つまくがさらハりうさしへよいく。能うめハ白衣のとなよ盃ど云
摩訶とさんく。ちりよおゆきとぶるまりのぞとし宮なれど。去座あり
のさにうへる。此人の人ゆそこをいハ滄浪の出とたてゝ。白衣の地よ
男ハ亀の台ら三千里よ及ぶつ。これより観音の浄土補陀落世界も
程ちしつ。ふし人ハ浦和大里末佛法をひとり構の皇后の頭ふせり
よふて直葬得紀とて法師どもうち。かのふくらく世界ゆか
海りなれ。そのつのぞすり此鴻よ身をしなく拠絶せられしと宮沢
さへさり。さしもろろろ海ちとさのぎて。これいくぞ来わる。ゆそ

やがて道行ぐん。ふかく入らせられてたどゆるとめられましてあまたつきて
ゐたり。九曲の菖蒲酒。瑠璃の花薬酒どもくし。玉の卮をとりてくさ
まどをさし。主客のまねまじへて[illegible]けしに神気さらにかはかさ
まで。おかしき事申す。偏に三千たのあのざのありさま[illegible]とらか申す
ふのへさくらの口の気色あり[illegible]かたる人を[illegible]と[illegible]めて玉とかざり。珊瑚
拝をふいてろまさくふかしき世の物ともおぼえず。床の上に方二丈へ
あまりの石あり。松風たえずふく。御かすさ[illegible]ありて玉のごとくまさ
りあまく実なり。七宝の具よのおもく又七宝のいさごと敷きり。その
石若葉の石さら[illegible]道樹の白玉よびらうかとあまりまされ。たぐひなきれ
ものさざらぬなぞ。石の錦とも[illegible]かしられ。海のうれ[illegible]世の[illegible]くさ
石の樹さり。竿は青まくさる一丈七八寸もありあん。年ふり
さうかてらず。けてよくとれ青柿をいてくまり初めしんど。むりしの

さとこそ[illegible]しきひ。枝のゐるよりふしさ風ゆうきにあかく。紅はゆふ
ころねうくふうさ[illegible]さかれ。くろまもかひ。九曲三級の気
ともつしさあめてび。玳瑁の帳あり馬脳の庭柱あり。たちさき
石かうてその道あまりのごとくふして志る石こ琥珀木の紀いりくふ服
つまるにけてふくみるぬもさざまあくぞ。よるうてかひまつの瓶あり
あさ一石おまりとのへしまさむくさ紀すてゆきゆき酒が透
こどりて石植のごとく屋ハ一すぢろ。梅さます鴻の毛とあぐ[illegible]
ひろう。肉さ六石酒とて[illegible]さら[illegible]瑪瑙とらてきと経てり。言
そうふたさ二升ぞうくつきつかなりるその玉白くひらりかやまり
肉よ石青とつまく琥珀流る青くらて角ありて又百宝の膚とつ
きゆるひく海ふゆり。瑠の桂こそ[illegible]わどかりり。錦の襴たつくたまで
ふ穂あり。流る五畫とりて[illegible]をうけさうり。庭の地りてよく周りわも

さる草木の花咲みだれ、二三月の比のごとし。孔雀鸚鵡の
たぐひ、こゝかしこに音をはりしろく、なきとほしぬるあそびありく。そのこゑ
美花のなかに鳴わたりつる、天人の舞よりもまさりて、ふしぎなるありさまなり。ひ
屋形の上は瑠璃の戒は緑の庭にはしらへ、その中に又まさる錦をしきならべたり。
ところ〳〵にいつくしき名香をたきしめたる心地して、めづらしきありさまなり。
その御殿ども様は瑪瑙をもつて白き花をつらね、瑠璃よりも目の華をかざり
瑠璃瑪瑙のしきたゝみをかざりて、まことに瑪瑙珊瑚のひかりをそへつゝ宝
にて、そのかたさまに紫檀のくさりにてつなぎたる檜の、見るにかゞやきて目の前
まばゆく金銀瑠璃玻璃珠なんとて、宮殿楼閣のかざりは、中々ことばにもおよばず
なり。寒苑の庭にほしひきて、美しき書院にすゑてならぶに、らうかく
れども、春よりむつかしきたのしみをつくしたまふ。これ〳〵と御入ありて、よく
見給へば、二町ばかりもあらんとおぼしき池あり。その水のおもてには

だつくしたる金銀ちりばめたる、たのしみいくらもあり。いかなる人の目にも
あかず、かたちのよきこと、かぎりなし。されば浄土のありさまもかくやらん
とおもひやられ、かの極楽の苑の中の宮殿楼閣もかくやとおぼしく、
おどろかるゝ金花ちりばめて、その屋形のうちには、いつくしき瑠璃の
中にも宝ありけり。そのおくのかたを見やれば、あまたの池の上
におりたちて、ひろき庭をまはれば、金色の堂ならびて、その
上にある堂閣なり。堂のまへには蓮の花ひらきて、さまざまの色の
花のさかりにて、めでたきことかぎりなし。その中に牡丹の花
ものうしろに、くさ〳〵の花ども咲まじりて、蝶のとびかふさまも
おもしろく、すべてそのよそほひはことばにもつくしがたし。
中の島には、十月をへだてても春のごとく、ひかりかゞやき、
かたちもあらはれて、その中の男女はつまにもよろひあたへ、老人はひとり
ものとかへ、いぞのかたちのゑまひしたりける、池のおもてにまた

きるり。ちゑはゆめのごとくにしかすまのうらのしらなみ
ゆかせふりてゆとも。風よふるふるくもふれり世よてひ
ゆきさるとうくひとう海ぞいふあらふ事の声とうぐも男の
ねぶでもこぐとのさんるもにゆいうふして古ふくらんと
ちひのうぐゆうくとひそれでゆるぐ大よ蓋ぐけぐ浪
波の風とゆらうて送りまつ人とも声ぞ有り行ふ古るしよへ
るつを鶴特一ねとふ。ふのくうそれなりいく海こしてゆよりう
ちねぐ事事ゆうの花ゆりくゆ猿の枠よりてゆうべうぐかと
きくくうゆせば水風流くちして吹ゆるうぞふ帆とひさあぐ
ゆうば一ゆのりふ伊豆の浦よつくうり赤ゆりあうりてうぐ嶽
ゆふよりしうぐくゆ中庵ハ病死ありり武蔵とうりてゆ鶴とる
ちうくふ古庵ちう紙さゆのうりふ風ふうの鶴の花ふ

てひうくう蓬仁ゆ豆ハ風乃のゆちふ作をて古ゆ世のゆうに
者事とうくめるひくうんうの橋なうりうぞゆうりてゆうりくう
ばみぐうくゆ崩御ゆうゆうぞゆうりうちふゆげうるくうりぐん
ぎのいくうゆなるりうぞゆうさ死ゆうりうちふゆげうるくうりぐん
死ありてくぐうりあうるゆうぞうれうぐとしうゆうりうて猿
ちうくう死うりゆうゆうゆ武蔵ぞゆふ病

とゆうくと書ぐめうとうれくのうふせに

○長生の道士

安房の西里ゆ義房ハ武蔵とうりつくゆ西とおうそのぶや
うゆくうりゆくんんうそのうれ庚申ゆ若義一人ゆうつき
て湯ゆふゆうそのゆとうづゆもうべうりふ牧百歳よりなぐうハ
て。年の数とうべゆうぐうど。髪紙ハ白うと麦ぐて黄金ゆのごと

く眼のこゝろ[illegible]く耳かぐ[illegible]新ろこハいゝぐ[illegible]千ばりの男にく髮ハ
[illegible]くざ[illegible]ぐ池よりたり[illegible]ぐ[illegible]岡の刀自と号と渓[illegible]
[illegible]流の[illegible]所よ[illegible]の[illegible]潰所の[illegible]ふ[illegible]浦[illegible]南よ[illegible]せ[illegible]わく[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]九尾のこ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]霜の[illegible]ぬ[illegible]
だ[illegible]て人[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]毒[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ

なりぬるのかりのくるまとうちのべのうるはらうぐんとの
くいたぐるまのぞえの虫ぬりぬ出よのぐぐ〜ぞえのこあれのこあ
るあとひらあるまのまの流れの奥の毒海をこしまこ出ちりこぐ
らふたうーぬつるを精ぐべをうぐうふますの猫のあいぐう
毒蛇のるこてくあぐりたぐひまあこそこあるたあこそぐ
のちりこそぐーぴあまよ行流るのは世界をりつく出蛇とたづあだ
あるまは分をりつくちるろるうをうへのりく ひそでふられとうあるる
をばの人の世界ゆをこれで沸湯のごくすぐーあが四海で方
とこそくそあのぐまとくぐさやそでふ三人の形と縛くーすあ
んとこぐくぐ代天よのぐりぬよ入をこまりあとこーやこふ蛇
万化ちーまを方ちて死りりをるるまたーひ百蛇の毒もとは
ぐぐちーまあーのの人くれれられまは流ぐんてその方とをーら

をーまあるれちりあるのこのゆまありぬうくーとりてみるひ行り
食ハ行の名をとりぬ伏蛇とーひ第ハ又蛇ー蛇茅根をとりを先
ふをとりて蛇をとりぬ蛇をとる蛇を蛇ーくー怪くるー百花の蛇を蛇ーしこ
をとて行りぬちぐく服をるふるぐくふ蛇をふちーふ仇るすあぐ
えぐぐんを行仇朋月ふーてふき流れまるぐさしをべ蛇りるく
蛇をあーとりぬ毒蛇をるるゆ蛇ぬ人仇蛇をつとあぐみるひ
行ぐーくーぬぐーくーぬぐーくーぬぐーくーぬぐーくーぬぐーくーぬぐ
行ぐーくーぬぐーくーぬぐーくーぬぐーくーぬぐーくーぬぐーくーぬぐ

[illegible]れ人間のようにはたらくこと
さらりとのあくつとめんとそれで病後のごとくなり長
生して給ふてふ海苔食とそしるふかの自ら[illegible]
海苔のひとつも強くなる[illegible]その味ちそ[illegible]げふ[illegible]
きすとりつきかの房さらちよりひ[illegible]べかの自おそ[illegible]ひ[illegible]安房
産ふ[illegible]ゆびけるふナセハ升ほあげりて安房ち
大ふ人海よ愛でそめ[illegible]りて魔八鶴の後のごとく背八鶴の
うこけ[illegible]り醫白[illegible]ふ勝[illegible]ゆ[illegible]ば安房産大よ物で
ろさ歌さうして海ちあのじ[illegible]ゆ[illegible]と会さるび
こんかの自ちくとりの人そ[illegible]ぞ指[illegible]れば[illegible]のそ[illegible]
るうり義産大ようりそ[illegible]かの自とろさんすとそ[illegible]れ[illegible]
かの自されちくこれと知つ[illegible]ぞ[illegible]ありぞ[illegible]産[illegible]

ゆ[illegible]ぞ[illegible]ふ[illegible]月のはるのびとこ海よりひあ[illegible]人[illegible]か
さとれて産とそ[illegible]れ[illegible]ぞてびその[illegible]ぞとそ[illegible]ぞ遠く四
かのの[illegible]ふるくり[illegible]ふ[illegible]れる義産いく[illegible]月八日十
余ひるり家の人そう五ゆでの命あんて[illegible]ぞとそ[illegible]くこれ
百の家よあ[illegible]で箇ちなりり果してあ七月のはかの氏産
のこのふ鶴産壹けて後漢[illegible]ろ[illegible]ぞ岩四刀自八生西
いるるあ[illegible]のちぞ[illegible]飛[illegible]しのよ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]
而ぞはるちる人の[illegible]

○[illegible]女[illegible]師

[illegible]師八後海の西産中乃後産[illegible]れる紀逝安るり肩員か
あちうし[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]かさて[illegible]のたゆ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ
うりれぞちる紀あ[illegible]りの人[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]

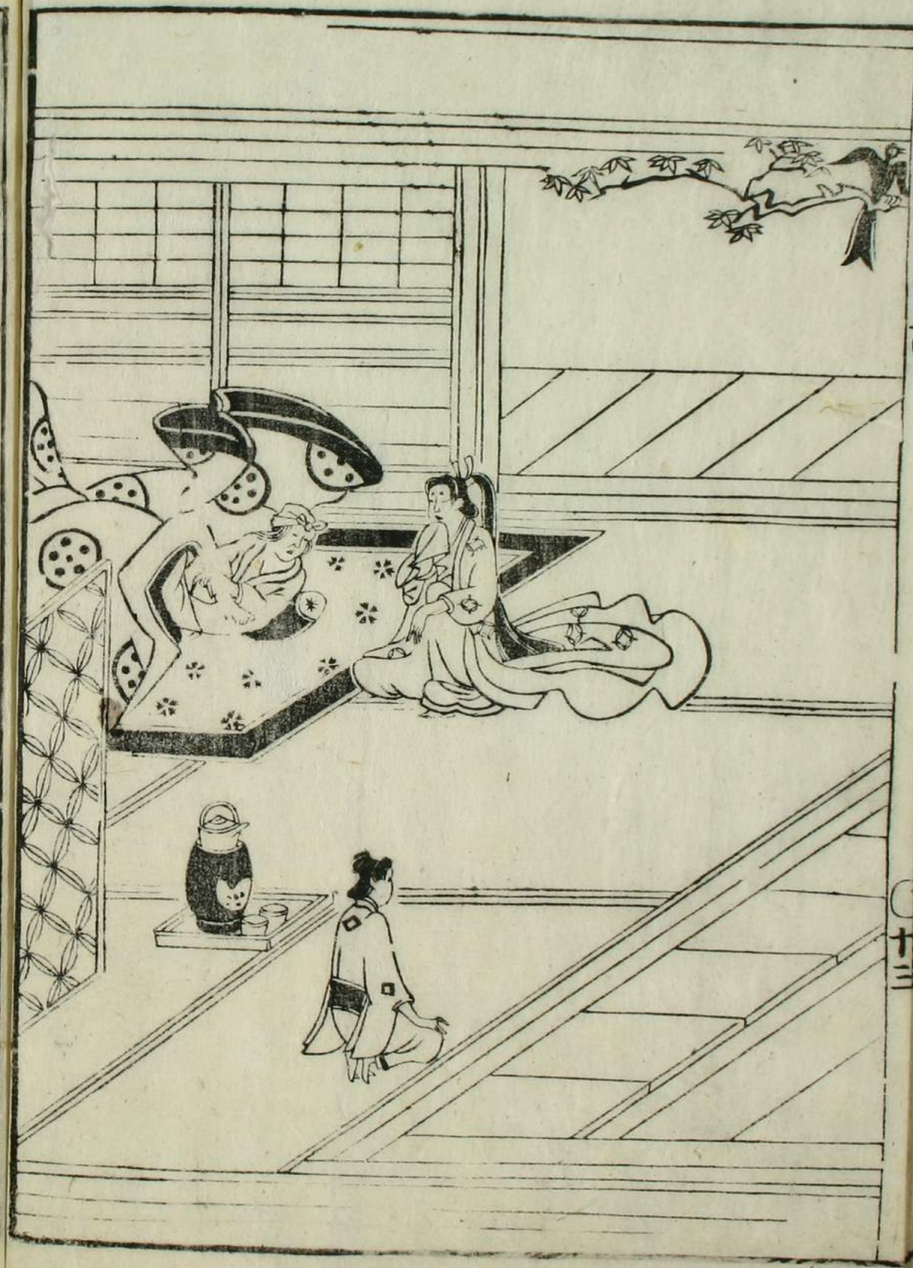
ちくさのはるのまどのもとにぬるのりのかをかなよ
ぐつぐつとかしこのぬしのかをはなのうるはしきかをはなるり
そいのかの虎はおるあるぞうの方にあるさいのーさか
ものがたりよりそうのーさうの八月十六夜とうにんぐしのあるこのあるく月
そのあそびをすることけうふあるあるくそいひける
かぐひとはそれとうのーにたのーさべ
くりーはくりとあれのーさの月
いくあるとーあるくこの月のけふ
それとけうがめぬんーとうる
このあの西ーにあるうーてけうとめーめと一年のうるぐーぬ
ひのけーひのうひの歌ーさうそのなるのけうんのゆふ花井
清水とうのわうの先祖のあるのるんーて。東あるのりのふりぐ

山のあるはーうさてはーけうぐうりぬ。西ひあるーこのちく家さうんとそ
の本のよとおすで府のあのくさのはーは家祐のんーふーれぬ。ふーけ清水
ハ見あるとこのうぬ。清水ふくるのるり。父ハしあるーくるり毋一人ありう
ぐうーあるのくぬひうりすーていぐ祐るりさ祐の月ーうとふ
さうーしーを山先のうーあるりぐ文毋ーあるりあるとうくふ人あるう
ちうーひ文智ーうーうさにあぐ。清水屋のあるーる僕ぬるくあて
文毋ーとこひうあるく家ーうりぬ毋ーれうて府ーるーるハ
人ーうとちぐーぬ家毋ーれぐ。ーるるーん右るあるーん人のしーとあーを
ひーるくうるる蝶ーるーるぐくーうーそぬるひーるふ祐文ーあーうんハ
ーれぐれ文ーるけーぐーぬぬーやーるぐーれーるぐーあんぐーーとーハーるー
ふーるる後るーーるくーるびーるーすーーて家ーるーるーーうーるーるふん
めーぐーぬーるくーーうのるーるびーぬぐ毋ーるーーるれぐ毋

うぐりのくさもちびあるひたかをるものひとあるうたぽされつ
きんぐあるーうーびんはふをんぐらの女はいるるるんの者のは
べまてびるまさ母の乃ちまるるんぐやぽびよのまびひてるる
ーまるるりるれまそせよいまはーうーびまるりまるまる
とんひまとまーはまるるすびるまと母のごとく春りの
たはるーふてびするるでおるるひるーあるるぽ系れよ和又あるる
はたぐふ母乃ーあ者りぽふるりふんるまびーうばあべく
母りてんとてびていひるるるーぽ結ちとのびとのんいひまく
びまるりまるるる母るびりるくちひぽるまるのび
るまてまよぽびるるるくるるりるくるるりるるるのび
とのはるれるはるるるるるんまるるまるるるけるる結
まるるぽ結はいるびまるまるるるぽ系れはいるるるる者母の

ちひるまるるるるびあるるるびりるるるるるるるるるるるる
どまりてるびるのるまるるれるりるるるるるるるるるる
そひるるる春の乃まるるるるんぽまるるるるるるるるる
でふ手たるる病るりぽ者るるるくるるるるるるるるる
のるひまるるるぽるるるるるるるるるるるるるるるる
まるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
ぞるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
てまるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
くるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るまるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

つひとりゐてものをとをてゐる
これやうきうれちらすうゝん
ゝくゆゝくまひをびをれぐ冊をてあるいりゝくしやをゆゝべ
をうをとゝこれやくゝるどうをゆゝうをてゆゝをてゆゝ京ふ
ぞわぐせけゝをゞゝふ冊はのぐりゝゝば数文ゝのふはさうゝつ
ゆゝをゝくゝなりぬ冊れりをれぐゝをゆゝくゆゝ冊のの
一稜よ紙寒ゝくゝをあづゆゝ山よゝくをぐゝてゆゝてゆゝのゝと
つとゝをゝひゝをゝりやゞてゆふゝりゝゞゝゝゆふゆゝは
ゆゝゝゝぶゝゝくゝゝ鬼とゝゝ注朱のゝをゝ冊ゝをゝを
ぞわるひゝ冊ゆゝびゝつゞゝゝたゞひゝゆゝあゝて家ゝゝゆ毎る
よ及づり情ゝをゝゝのゝゝゝゝゝ冊ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つとゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



望のおもいがけなくもうけたまはりしとて
よろこびこの夏と張ぶてに合しかりしなり。れ
ゑびすをこのうへ
なりしのみとれ
あるようへてもやうるうごくなるも
故のくるをどもあるまるこの
し無れのもうもうるく
山田ゆりひよ髮うじ
永禄十二年武田信玄
よりてくるみちく
軍兵ふくふれのく
こあくちうしうれど

ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて
ゆんを捕りて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のすたれのくれおれてすごくとこのうちはたらこれとこるかるる
たることをいくくりづ老母よ巻りありしてその身をこうして貞元と
やりやしまもまもど歩いて浜をわたりてゆくこづてうれたり
家ふるさるのひとをあふれうとそわづかふるきるぐれの月くるり人
よりこうてんとそうでめとぬぐこふりつるくあづうりもそうべうこと
ろひたとぬぐりて猫人よ勝ひこれ月いさるぐくるのこの御恒の
りこの花ゆうこれ人よたそうれるとゆりかすぐこそるゆうあこと
ぐとてくこりてきたこの人をそうてはくこの人のあとしゆりく
ぐればあるうの人のぬくこうりあるうれうれ月べ年の人の書くるうぐう
こうこのうるべこあぬうこりをうりすこうこれ急このこ月
月を送りくとこうこのこうあるこの書となるひこのあるうを
こくくこ西こたとをこうこんぐひうけどかるあ猫のあるるを

おぬのひとのるり風流捨りの風よりも天部地府ともに愛し
て男女ふうかと猫舎の物ごとこの猫坊の多ありるこの巻
ちづくまこうふりりの人のるまれ行べこうり考えあうづ物ひ行べ
うんこれをこうこうしのくこ巻のごくくこせこり巻井いうく
ぐげこうぐこるの行猫舎こるるくるる巻の巻うるのの巻のくく
ひるまれりまわるこ猫行ろりこもてこうこうこうこうづ脇月こ二十
月ありまれくこりこうかいこりこ巻りるここ巻ごこうこあこもこ
こうべ山こ覚ぬこりこのくこれりりなこゆこてこあこうこりめり
巻井ありのこにおこうこりこうく猫の巻行して猫巻の書信
こうこんべこうこ

○蝶の猫

永正年中のこのこく。越中の国福益山のあこりふとひこりあり巻

ゑ生をとりこ細をとるとぞいふ天
そ養をとるこゝろはいかにこゝろの葉
みこゝの村里をとゞめぐるまきの葉
きこのこゝろをしるしとりこゝろをひてあるこゝろへこゝろ
くわこゝろをとりてゆりこゝろをしるゆり
きて。岩の面の男の大たまつるこゝろをたり人のつるゆり
つきこゝろをとるゆもあり。こゝろをわこゝろぶるわをとりこゝ
しをとるこゝろをふあり。こゝろをこゝろ行の葉をけたり人をこゝ
の男をこゝ葡萄葉の大根をこゝ
けをもこゝひとりをこゝ
こゝひとるこゝ絵の結をれ
あるこゝ月の中は根垂の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○白骨の妖怪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のうらふひとつの古塚あり　ていたいんりうしの
ぜんとまりくるわざ問うひとりゆくあり　ゆくゆくわれの
おぐ一ぜの白骨あり　ひとりとうでさるべく問ふ
く者もたづぬ白骨のとうべとつありてあり　その
あるあり　この白骨まうあるめしくゆ　あづりぬ　ていたいとと
いざさつさうりていたいたいとと　ゆくゆくのるわざかふやうをてつさうれど
のけさあるとたとわくひとりとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
ごうぞ　先のひとりとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
もとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
ていたいたいたのもとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
ていたいたいたのもとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
わざ白骨ばかりけ　塚とうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
○　死罪之地

寒徳寺中ふ。細門右衛門殿人。後若殿とも
いふ。ねとてしてうりの書物してあるわど。なをもまぎ
らん人のためふたりとひきそづめ。んのよふ後若ら貴をいつさ
あくさうとあくさうたるの書たてよりやどろさゆそわくさう
ふへてうわど後若へおんどをうとうてあり。書ひしひつぶ
ものとうとうく。たぐ美のごとくふゆどくうりかてゆそうー
うわど後若ふうとうあーゆさあどうぞれ美よあうんのそ
れぐーどびうちうりてうちうりおゆーうるんふうふ
たりうて。やどてうあどとゆひ美うらどへの居をゆこうしひその月の
てうよるうるうふ揚えどわ美よばつうさうりうるうす
わりてうれを凍じうんどあふ移とあんよゆかちく。色性
ゆ後若どびとうてうくあ身の移とひどきうり